



WEB PAGE

田畑益弘

太陽書房

目次

2002年8月	5
2002年9月	21
2002年10月	38
2002年11月	57
2002年12月	75
2003年1月	93
2003年2月	114
2003年3月	132
2003年4月	152
2003年5月	170
2003年6月	187
2003年7月	204

2002年 8月

八月の東京にある静かな

八月の蝉の骸^{むくろ}が目につく日

百物語ふつと背^{うし}ろが気になりぬ

火蛾群るる島を離るる朱き灯に

心火なほ鎮まり果てず火蛾狂ふ

或る毛虫毛虫の群に見失ふ

青空を残して毛虫焼き尽くす

一瞥もなく鬼やんま通り過ぐ

蜻蛉ゆく我には見えぬもの見えて

蜻蛉の眼敗れし国を一望す

ウィンドウズ快調にして朝涼し

虹を見て老女何やらひとり言つ

夕凧いで生活たつきの水の音聞こゆ

豆腐のみすいすい食うべ極暑なる

夜の秋の閑かに紅茶いたゞきぬ

躰のゆがみただ整されてある夜の秋

山の石海の石手に夏惜む

夏惜む鰻と穴子いづれ食はん

もう一度真ま蒸むしを食うべ夏惜む

水かけて水かけて灼けた墓冷ます

旱天をこの川も流れねばならず

白雨来よ心のひづみ癒すべく

蟻に熱湯かく我れ神の如し

定刻に沖を見て佇つ白日傘

長き長き墓への道を白日傘

本の虫たりし青春曝しけり

通夜の燈に狂ふ白蛾を宥しおく

一匹の蠅のからかふピエロかな

大阪や立呑みが良き冷し酒

立呑みの膝がガクンと冷酒かな

焼酎や迷路の如き裏町に

焼酎や京は裏寺通りかな

カクテルで始発まで夏惜しみけり

せはしなき扇となりし負け将棋

暑氣払ひとて四合の大徳利

冷酒とて肴は京のお晩菜^{ばんざい}

夏河へ小便小僧みな弓なり

裸なり海より^あ生れし命なり

地球儀の日本赤し原爆忌

原爆忌戦争知らぬ眼を瞑る

原爆忌卵の黄味に血の一滴

原爆忌瞬けば蝶ふつと消ゆ

空きビルのほとり病葉吹き溜まる

痩せたりと人に云はれて秋立ちぬ

今朝秋の水に身ぬちの水更ふる

日に三度食前に飲む残暑かな

ビル街にビル風の吹く残暑かな

ネクタイで首締めてゐる残暑かな

おこた
怠りて金魚を死なす残暑かな

大夏野行くかちわた徒渉る如く行く

無人島ゆび差すそこに夏怒濤

おやすみと云ひ兜虫あす死ぬる

少年に死を教へけり兜虫

我に還るプールに深く深く潜り

片蔭に入る人生ゆ降りること

し
己が影に躓きてゆくなる油照り

いづくかに閻魔の哄ふ旱空

鱧皮の財布にしまふ蛇の衣

怖れらることの淋しき蛇を見る

閃くよ蜥蜴の智慧は尾の先に

恐竜の化石など見て原爆忌

原爆忌ジグソーパズルすぐばらばら

けふのことあしたにまはす籐寝椅子

短パンの脛をピシャリと蚊を逃がす

放蕩児帰りて寝まる夏座敷

一族も郎党も寄る夏座敷

粗供養といふハンカチをまた貰ふ

人の死を哭きし眼まなこよサングラス

夏帽を脱ぎておろが拝む磨崖仏

噴水の止りし水の疲れかな

噴水の触るるものなき虚空かな